

衣 更 え

松井淑子

ことに春秋の衣更えの季節になると、私は外出に先立って、ベランダから通りを歩く人々を眺め、その服装を参考にすることが多い。たとえばシャツだけだったり、上着を着ずに手に持ったりしている人が多いときは、今日は暖かいのだな、と思って、それにならった服にする、といった具合だ。

と言うのも、私のうちは、マンションの二階の、かなり西に寄った南西向きの部屋で、おまけに窓も二重のため、晴れていれば昼から日がよく射し込み、冬場でも昼間は暖房を消すほど暖かい。ところがこれが問題で、戸外との気温の差が大きく、外に出て初めて本当の寒さに気付き、あわて厚着に着替えに駆け戻ることがしばしばだからである。

先日、外を歩いているうちに寒くなり、だが医師との約束の時間が迫っていたため着替えに戻る暇がなく、そのまま病院にいったところ、

「そんななりだと風邪を引きますよ。自分のからだなんだから自分で管理してくれなけりゃあ」

と主治医に叱られてしまった。

着る物にいちばん頭を悩ますのは、天候の変動が激しい春秋である。この時期、テレビの気象情報番組が服装情報を一緒に流してくれるようになったのも、着る物に迷う人がそれだけ多い、ということだろう。

和服の場合、昔は季節ごとに着るものがほぼ決まっていた。その影響か洋服にも、ことに学校の制服などには、六月から夏服、十月からは冬服という決まりがあり、一般の人々も、洋服については寒暖の実感とは関係なくそれにならっていたようである。

季節と服装について、今でも忘れられない光景がある。それは終戦後まもなく、代々木のワシントン・ハイツ（旧日本軍の代々木練兵場で、今の代々木公園）で暮らすようになった進駐軍兵士の家族たちの服装である。多分四月末ごろだっただろうか。まだ夏前だというのに明るい色の半袖の服を着た女性たちの姿が見られ、それが周りの樹木の新緑に映えて、なんとも美しかった。

洋服というのは、四季と関係なく、天候の変動に合わせてなにを着てもいいのだな。そう思うようになったのは、このあたりからのようである。

ついにながら、そしてこれは衣服とも衣更えともまったく関係ないことだが、敗戦を終戦、占領軍を進駐軍と呼ぶようになったのはいつからで、そしてなぜだろう。これは私の昔からの、そして未だに解けない疑問である。ワシントン・ハイツの風景を思い出すと一緒に思い出した。